
主を求めて生きた預言者

アモス書 聖書研究の手引き

アモス書聖研の手引き 発行にあたって

KGK関東地区主事会ではここ数年、学生の皆さんが学内活動の一環として行うグループ聖研の助けとなる聖研の手引きを数冊発行してきました。しかし、今までの手引きはすべて、新約聖書からのものでした。それは、主に伝道聖研用のテキストの必要からでした。新約聖書からの手引きの数もまだまだ少ないのですが、クリスチャン同志で旧約聖書から学ぶ聖研のテキストも発行していきたい、との願いを関東地区主事会ではかねてから話し合ってきました。

私事ではありますが学生時代、学内のクリスチャンの友人たちと「聖書を読む会」発行の『神の人四人』『旧約聖書の聖徒とともに』のグループ聖研の手引きを用いて旧約聖書に登場している人物の学びをしたことは、今でも印象に残っている楽しくかつ有意義な機会でした。主事になって以来、学生兄弟にはグループ聖研からの発見の喜びを伝え、学内活動での聖研の充実を呼び掛けてきたつもりですが、残念ながら旧約聖書からのグループ聖研を定期的に行っている学内グループはそれほどありませんでした。そこで、この度旧約聖書の中で小預言書と言われている書の一つであるアモス書からの8回に渡るグループ聖研のテキストを発行することにしました。本書は私が今まで早大KGKと都立大聖書研究会で、学生兄弟の要望に答える形で実施した「主事聖研」（主事が司会をして半年間まとまった学びをする機会）のうちに用いたテキストを大幅に改訂してまとめたものです。

何故アモス書をテキストとして選んだのかと言えば以下の理由からです。

アモス書は審判者である「神の正義」「人間の罪」（社会的不正、宗教的偽りの礼拝など）をテーマにした預言書です。この書の学びを通して、今日の世俗社会を正義の神がどのような目でご覧になっているかを知ること、またクリスチャンである私たちがこの社会において何に警戒し、何を求めて生きていくかの指針を問う機会となればと願ったからです。

本書は一応、クリスチャン学生を対象にしていますので、従来のテキストのような「司会者の手引き」は設けませんでしたが、しかし、若干のヒント、解説が必要であると思われる設問には簡単なコメントを記しておきました。また旧約聖書の一書であるアモス書が新約聖書とどれほど密接な関わりがあるかに注目した質問を、ところどころに設けているのが特徴です。旧約聖書の一つの預言書と新約聖書との関連を、聖研を通して発見することで、聖書は聖書によってより深い理解に至るという経験を、少しでも皆さんに味わってほしいと思います。

アモス書聖研の手引き書を使用する皆さんが、旧約聖書を共に学ぶ喜びを、学内活動において体験できることを期待しております。

関東地区KGK主事 水口功

アモス書概観

●はじめに:

預言書を学ぶにあたって次の点に心をとめることを奨めます。

(1)旧約聖書の歴史全体の中での位置づけ

旧約の歴史は神の創造から始まり、イスラエル民族の先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフと「選びの民」の歴史が展開されていますが、古代イスラエル民族は、モーセをリーダーとした出エジプト（BC.13世紀）の出来事によって民族として具体的な出発を始めました。

「先祖に対する神の約束から、出エジプト、シナイ契約、荒野の旅を経て、カナンの土地を取得するまでの、神の救いの歴史は、旧約聖書に繰り返し、書き記されている。この救いの歴史こそ、イスラエルの基礎であり、また創世記からヨシュア記にいたる旧約の最初の六つの書物全体の枠組みを為す者である。」（木田献一「旧約聖書概説」聖文舎p.4-5）

旧約の歴史はその後、ギデオン、サムソンなどの士師の時代、サムエルの登場と王国の成立（BC1000頃）、王国の分裂（BC930頃）、北イスラエルの滅亡（BC722）、バビロン捕囚（BC586）、神殿再建と続き、ここにも、神の裁きと救いの歴史を見ることができます。このような中でその預言者がいつ頃の人であったかを把握しておくことが、全体の理解にとって欠かせません。

(2)預言者が預言した状況

次に預言者が活躍した時代の特徴を把握することです。そのためには、引照聖句を頼りにして、預言者が生きた時代にどんなことがあったかを他の聖書から学ぶように努めましょう。

(3)未来の出来事の成就

学ぶ預言書と新約聖書との関連を、やはり聖書の欄外に記されている引照箇所を見て調べると良いでしょう。そのことで、旧約聖書と新約聖書の一貫性が発見できます。さらに、預言書に記されている内容と現代との関連を思い巡らすことで、神の言葉である聖書の永遠性（マコ13:31）を確認できます。

■アモス書についての概観

1.著者はアモス・・・名前の意味「負う者」（神の審判を背負う）初めての文書預言者

2.アモスの出身・・・1:1「テコアの牧者のひとり」

*聖書地図を参照してみましょう。ベツレヘム（南ユダ）南方9kmの小高い山の上の町

3.職業・・・7:14牧者、農夫

*預言者集団に属さない農夫であったアモスが預言者として選ばれた意義について考えてみましょう。

4.預言の場所・・・北イスラエル

*当時は南北の行き来は自由にできました。

5.アモスの時代・・・BC8世紀前半～中頃

(1)北イスラエルの王ヤロブアムII世（BC786-746）の時代

同時代にこの場所で活躍した預言者・・・ホセア

*II列14:23-29を読みましょう。

ヤロブアムについて、また彼の治世のイスラエルについてわかることは何ですか？

(2)南ユダの王ウジヤ（別名アザルヤ、BC783-742）の時代

同時代にこの場所で活躍した預言者・・・イザヤ、ミカ

*II列15:1-6を読みましょう。

この箇所からアザルヤ（ウジヤ王のこと）についてわかることは何ですか。

- ヤロブアムII世の時代は外国からの侵略がありませんでした。その理由は常にイスラエルを苦しめていたアッシリヤ帝国が、この時代はこの国の北に位置したウラルトゥ王国からの脅威のために弱体化し、その結果イスラエルに勢力を拡大できなかったからでした。それゆえ、イスラエルは経済的に繁栄しました。

さて、経済的繁栄をしていた当時のイスラエル人の生活ぶりはどうだったのでしょうか？

*アモス書5:21-24を開いてください。

ここで「わたし」とは神様のことであり、「あなたがた」はイスラエルの民を指します。

この箇所から当時のイスラエルの民の生活ぶりについてどんなことに気付きますか。

- 当時のイスラエルは経済的繁栄の下で、宗教的、道徳的、社会的に腐敗していたようです。儀式は活発でも(5:22)形骸化・世俗化が甚だしく、彼らの困窮者、弱者に対する冷淡な仕打ちを神は非難しています。(4:1) そこでアモスはこれらの人々、特に豊かな階級の人々に向かって、糾弾しました。これはアモスを用いた神の言葉でした。それでは、1章から順にアモスを通して語られた神のことばについて学びましょう。

一、二章 諸外国に対する主の裁き 神の民の国に対する神の取り扱い

●はじめに:

1章1節から2章3節まで読みましょう。この箇所には、イスラエル・ユダの周辺諸国に対する主の警告について記されています。

(1)1:3,6,9,13,2:1に共通に記されている言葉は何ですか?

この表現からどんな特徴があることがわかりますか?

(2)人々の罪に対する感覚について

(3)主の人間の罪に対する態度について

それでは、諸外国の罪の実態を具体的に見ていきましょう。

I. 諸外国に対する主の裁き 1:1-2:3

1.主はどの国々に対して警告を与えていますか。

*聖書地図を参照しながら、確認してください。

2.これらの国々に対する主の態度は「その刑罰を取り消さない」という厳しい態度でした。主は何故、そのような厳しい態度をとったのでしょうか?一つ一つの国の様子から具体的に考えてください。

a. ダマスコ (1:3-5)

b. ガザ (1:6-8)

c. ツロ (1:9-10)

d. エドム (1:11-12)

e.アモン (1:13-15)

f.モアブ (2:1-3)

3.a~fまでの出来事と今日の世界情勢や、人々の生き方とを照らし合わせる時、どんな共通点があると思いますか?



これらの国々は主の預言どおり、後に滅ぼされたり、屈辱的な体験をしました。このことから主は、残虐な行為を繰り返す国々を決して見過ごしにされない「正義の神」であることがわかります。それでは、続いて神の民と言われたユダ・イスラエルの態度と彼らに対する神の取り扱いを見ていきましょう。

II.神の民の国に対する神の取り扱い 2:4-16

1.ユダ (2:4-5)

(1)ユダにはどんな問題がありましたか?(4)

(2)主はこの国に対してどんな警告を与えていますか?(5)

2.イスラエル (2:6-16)

(1)イスラエルの民にはどんな問題点がありましたか?(6-8)

(2)主はこの国に対してどんな警告を与えていますか?(13-16)



神はユダ・イスラエルの民が選びの民だからということで、彼らの不正を見過ごすことはありませんでした。それは今日の私たちクリスチャンの社会生活に対する警告でもあります。ユダ・イスラエルの社会的な行為における欠陥とそれに対する神の裁きから、私たちはどんな教訓を得ますか?

3.

(1)神はイスラエルの人々にどんな事を思いださせようとしていますか? (9-11)

(2)これらのことから、神がイスラエルの民に対してどんな思いを持っていたことがわかりますか？

★終わりに:

私たちが神に逆らって罪を犯したことに気付いた時、私たちはその問題解決のために、神に対してまた神が統治される私たちの社会に対してどのような態度をとったら良いでしょう。この箇所から学んだことを挙げてください。

三章

イスラエルの特権と責任

●はじめに:

今回は2:6-16からイスラエルの罪とそれに対する神の裁きについての概要を見ました。3章から6章にはそのことの具体的な内容が展開されています。

1. 「イスラエルの子らよ。・・・このことばを聞け」(1)という言葉から、主のイスラエルに対するどのような思いが感じられますか?
2. イスラエルの人々にはどんな特権が与えられていましたか?(2) それゆえに、どんな責任があったと思いますか?
3. アモスは3:3-8を通して、彼が預言する(神の言葉を預かって語る)根拠について譬えを用いて記しています。

(1)この箇所から彼が預言していた理由を考えてみましょう。

参考: 3:3-5の譬えは、一つ一つの行動には、はっきりした根拠があることを説明するために用いられていると考えられます。

- | | |
|-----|---|
| 3:3 | 打合せて会わない限り、一緒に歩くことはない
(アモスは人がほとんどいない自分の出身地テコアの荒野を想定している) |
| 3:4 | 獅子がほえるのは、獲物がある時 |

(2)またこの箇所から、預言者の役割(今日のクリスチャンの役割)は何だと思いますか?

(3)そのために、今日、主イエスは私たちにどんな約束・励ましを与えて下さっているでしょうか?ヨハ14:17, 14:26, 15:15, 15:26, 16:7を参照して考えてみましょう。

★

3:9以降には、イスラエルの民のそむきの罪と神がそれを罰することが記されています。

3:12「寝台の隅やダマスコの長椅子とともに救い出される」は、サマリヤ（イスラエル）の全面的な滅びを意味しています。

3:14「ベテルの祭壇」は北イスラエルの初代の王ヤロブアムが建てたもので、これは神から離れたイスラエル王国を象徴しています。

4. 3:15に記されている「冬の家」「夏の家」「象牙の家」から、当時のイスラエルの人々の生活ぶりがどのようなものであったと考えられるでしょう。

★終わりに:

イスラエルの人々は経済的繁栄に傲り高ぶり、神から与えられた特権に対する責任を放棄して、神から離れ自分勝手に歩んでいました。そういう民に対して神の裁きが及びました。イスラエルが「選び」の特権に預かったように、私たちも一方的な恵みによって、「神の子どもとされる特権」（ヨハ1:12）を与えられています。しかし、私たちが遣わされて生活している世界には様々な誘惑があります。アモスの時代のイスラエルのように、物質的誘惑もその一つです(参考: 1ヨハ2:15-17)。物質的に豊かな日本に住む私たちは、どんなものに警戒したら良いかを話し合ってみましょう。

四章

語る神 立ち返ろうとしないイスラエル

●はじめに:

3章に引き続き、4章でもイスラエルの退廃の様子が記されています。

1. 「バシャンの雌牛ども」(1)とはサマリヤに住んでいた上流階級の婦人たちに対する非難の言葉です。彼女たちの生活ぶりはどのようなものでしたか?

2. 4:2-3の女たちへの対応から神についてどんなことがわかりますか?

参考: 4:2 「釣り針にかけ」 イスラエルの民がアッシリヤの捕虜として、残虐な取扱いを受ける
捕虜は下唇の所に輪をかけられ、つなをかけて引っ張っていかれる
4:3 「城壁の破れ口からまっすぐに出ていく」
自分たちが住んでいた思い出の地を振り返る余裕もなく
捕虜として連れられていく哀れな姿

3. 4:4-5から当時のイスラエルの人々の宗教的生活についてどんなことがわかりますか?

参考: 4:4 「朝ごとのいけにえ」 「三日ごとに十分の一のささげもの」
規則正しさを示す。いけにえの肉の一部を後の祝宴に用いる。
「ベテル」「ギルガル」北イスラエルの聖所があった場所。
4:5 「種を入れたパン」 礼拝者の満足のために用いられた。礼拝者の好み優先の結果。

4.

(1)4:6-11に繰り返して表現されている言葉は何ですか?

(2)この箇所から、どんなことがわかりますか?

a. 「イスラエルの子ら(人々)」の特徴について

b.彼らに出来事を通して語りかける「神」について

参考: レビ26:18, 21, 27, 28, ヘブ12:5-8

「帰って来る」

悔い改めると同じような意味

4:6 「歯をきれいにしておき」

飢饉のために食物が欠乏した状態

4:9 「立ち枯れ」

熱風、

「黒穂病」

雨の降りすぎにより農作物を襲う真菌性の病気

5. 4:12-13 「それゆえ～」に示されている神のイスラエルへの思いについて、どんな印象を持ちますか？

★終わりに:

私たちは毎週、教会で礼拝をささげます。しかし、気をつけないと私たちの礼拝はアモスの時代のイスラエルの人々のように「形骸化」し、信仰の原点である神からのメッセージを聞く(マコ4:9, ロマ10:17)チャンスを失います。私たちにとって「神に会う備えをする」(12)とはどういうことでしょうか？

また、そのためにはどんなことに心がけたら良いと思いますか？ 互いの経験を振り返り、分かち合ひましょう。

五、六章

絶望的なイスラエルの状況

イスラエルの不従順と神の裁き

●はじめに:

これまでアモスが預言者として活動していた紀元前8世紀にイスラエルが退廃する様子を見てきました。アモスはイスラエルの外面的繁栄の陰に潜む不信仰、不真実を見て「哀歌」を唱えなければなりません。今課(5, 6章)では、このイスラエルに対してアモスを通して語られた「神の嘆き」と「神の人への思い」を中心に見ていきましょう。

I. 絶望的なイスラエルの状況

1. 哀歌の内容 5:1-3

(1)アモスはこのままでは「おとめイスラエル」はどうなってしまうと言っていますか？

(2)5:3からイスラエルの将来についてどんなことがわかりますか？

2. 社会不正の実態 5:10-13

(1)「正しく語る者を忌みきらう」(10)というのが当時のイスラエルにおける典型的な感覚でした。私たちの周囲ではどうでしょうか？

(2)貧しい人たちに対するイスラエルの人々の態度はどのようなものでしたか？

(3)どうして「賢い者は沈黙を守る」(13)ようにしたのだと思いますか？

3. 嘆き 5:16-17

(1)この節に嘆きの様子が記されていますが、嘆きの最大の要因は何ですか？

(2)あなたは今、国の状況をどのような思いをもって見えていますか？

4. 主の裁き 5:18-20

(1) どうして「主の日」は「やみであって光ではない」(18, 20)のでしょうか？

(2) 5:19から主の裁きについてどんなことがわかりますか？

II. イスラエルの不従順と神の裁き

5. イスラエルの人々の宗教的状況と神の反応 5:21-27

(1) この箇所には、イスラエルの神のどんな思いが込められていますか？

(2) 何故、神は穀物のささげ物、和解のいけにえを喜ばないのでしょうか？

参考: マコ12:33

(3) 何故、神は(人々が賛美のつもりで歌っている)歌を退けておられるのでしょうか？

(4) 神に喜ばれるささげ物、賛美とはどのようなものだと思いますか？

参考: 詩51:17, ホセ6:6

(5) イスラエルの人たちに出エジプトに伴う「荒野にいた四十年」について、まるで当事者に語るように語った神の意図は何だと思いますか？

参考: 使7:42-43

ここでステパノは律法学者や民衆に対して福音の説教をしているが
その中で神に不従順な先祖の様子を説くためにアモス書のこの箇所を引用している。

6. イスラエルの人々の政治・生活状況 6:1-7

(1) イスラエルの領土は他の王国と比べてどうだったでしょう？

参考: 「カルネ」「大ハマテ」 イスラエルのさらに北に位置する

(2) 5章において主の裁きの宣告があるのに、何故彼らは「わざわいの日を押しつけている」(3)と
思っていたのでしょうか？

(3) イスラエルの民が関心を持っていたことは何でしたか？ 反対に関心を持っていなかったことは何
でしたか？

7.神の裁き 6:8-10

(1)神が憎まれたことは何でしたか？

参考: 5:21

(2)神が憎まれた結果として、どんなことが起こりますか？

8.裁きの理由 6:11-14

(1)「公義を毒に変え...」(12)とはイスラエルの民のどんな姿を表していますか?6:12aを参考にして考えて下さい。

(2)一つの民(アッシリヤ)を動かすという神の宣言から、神と歴史の関わりについてどんなことがわかりますか？

III.絶望的な状況のただ中での神の呼びかけ

9. 神がアモスを通して、イスラエルの民に勧めていることは何ですか？

(1)5:4, 5:6

(2)5:14

10. 「主を求める」ことと「善を求めること」の共通点と相違点は何だと思えますか？

11. 神を無視して生きていたイスラエルの民に対して「生きよ」と言われる神の言葉から、神の人間に対するどのような期待、気持ちが伝わってきますか？

★終わりに:

イスラエルの不従順に対して、神は決して見過ごしにはされず、裁きの宣告をされました。しかし、そのような状況のただ中でも完全には見捨てず、「主を求めて生きよ」と神の方から民に対してメッセージを送られました。最後にIIペテロ3章9節を読みましょう。ここに、今日も神が時として不従順な私たちに対して、どのような願いと期待をもっておられるかが要約されています。私たちは、この聖句を自分自身でしっかり受けとめ、私たちの生活を通して友人にも、歴史の中で働く神の真理を伝えていけるよう祈り合いましょう。

七章

三つの裁きの内容 アモスとアマツヤの対話

●はじめに:

7章は「神である主は...私に示された」という書き出しで、アモスが神から示された3つの事柄について記しています。これらは、神に従わないイスラエルの民たちに対する、神の徹底的な裁きについて示しています。その3つとは、いなごと燃える火と重りなわでした。

I. 3つの裁きの内容 7:1-9

1.

(1)いなご、燃える火を示した主に対して、アモスはどのように答えていますか?(1-6)

(2)このことから、預言者の役割についてわかることを挙げましょう。

(3)私たちは自分のこと以外のとりなしの祈りについてどれほどの関心を寄せて、実行しているか考えてみましょう。

2.

(1)重りなわをイスラエルの真中に垂れ下げるとは、何を意味していたと思いますか?(7-9)

参考: 「重りなわ」 建物が垂直にできているかどうかをはかる道具
なわの先に重りをつけているもの

(2) 7:1-9 「見よ」という言葉が4回も記されています。また7:8で主はアモスに「何を見ているのか」と語っています。主はどうして預言者アモスに「見る」ことを強調しているのだと思いますか?またあなたは今、学内や教会、日本の国のどういう点を見ようとしていますか。

参考: 「アモス書7章1、7節、8章1節の<示す>は<見させる>でラーアー<見る>の使役形である。預言者の<見る>は神が<見させる>のだ。」
(千代崎秀雄「聖書のシナリオ」いのちのことば社p.127)

(3)アモスはいなぎ、燃える火については、必死でとりなしましたが、重りなわが下げられた際にはしていません。それは何故だと思えますか？

II.アモスと祭司アマツヤとの対話 7:10-17

アモスは民に、神の裁きを警告しましたが、人々はそれを拒絶しました。その代表的姿勢がベテルの祭司アマツヤのうちに見られました。

1.祭司アマツヤのヤロブアム王に対する進言を聞く限り、王はアモスをどのように評価し、一方アマツヤをどう評価したと考えられますか？

2.「ユダの地へ逃げて行け」(12)「ベテルでは二度と預言するな」(13)という言葉に注目しましょう。

(1)この言葉にはアマツヤのアモスに対するどんな思いが表されていますか。

(2)「ベテル」とは「神の家」という意味です。この地はかつて神が夢を通してヤコブに語った場所(創28:12-15)であり、またその20年後再び訪れたヤコブが主の臨在に対する感謝の祭壇を築いた場所(創35:1-7)でした。そのベテルで預言をするな、という言葉聞いた神の御思いはどのようなものであったと推測しますか？

3.

(1)アモスのアマツヤへの応答(14-15)から、アモスがどうしてイスラエルで預言していたか理由を挙げてみましょう。

(2)アモスとアマツヤのような対話は、新約聖書においてはペテロ・ヨハネと民の指導者・長老たち(使4:18-21)とのやりとりの中に見いだせます。この両方の出来事から、神の言葉を伝える私たちは神の権威、人間の権力について、どのような理解をしたら良いでしょうか。

4. 7:16-17でアモスは主の言葉を聞かないアマツヤにどんなことが起こると警告していますか？

★終わりに:

あなたは、主がアモスに「行って預言せよ」(15節)と言われた言葉を今、どれほど自分に対しても語られている言葉として受けとめていますか。もし預言する（主の言葉を語る、伝道する）ことを躊躇しているとしたら、何が妨げとなっているのでしょうか？

第八章

夏のくだものの幻

●はじめに:

7章でアモスが見た3つの幻について注目しました。8章においても、裁きの幻は続きます。

1. 4つ目の幻は「夏のくだもの」でした。

参考: 「終わり」(2)はヘブル語では「ケーツ」「夏のくだもの」(ヘブル語「カイツ」)との語呂合わせ

(1) 「終わり」とはイスラエルの民のどんな状態を示していると言えますか?

(2) 「終わり」と宣告された場合、私たちはどのような気持ちになりますか?

2. 8:5-6を見てください。

(1) ここではイスラエルの民の生活の特徴がどのように要約されていますか?

(2) これらの特徴は、私たちが住む社会においては、どのような場面で見いだすことができますか?

(3) あなたは、これらの現実をどれほど敏感に感じ取っていますか?

3. イスラエルの民の態度に対する主の反応はどのようなものでしたか?(7, 8)

4. 8:9-10には神の裁きの内容について記されています。

(1) 裁きの時に、どんなことが起こると警告されていますか?

(2)ここに記されている内容を読んで、イエス・キリストの十字架を思い起こす人がいるかもしれません。ここから、キリストの十字架の意味について考えてみましょう。

参考: マタ27:46, ロマ5:17-18

5. 8:11に注目しましょう。

(1)「神が送るききん」とは何ですか？

(2)「主のことばのききん」と「主のことばを聞くことのききん」との違いはどこにあると思いますか？

(3)聞くということは、私たちの人間関係、互いの理解のために大変重要です。しかしなかなか実行できないものです。私たちはどういう場合に、聞くことが難しくなりますか。

6.イスラエルの民は聞こうとしない結果、いざ聞きたくなった時、どんな状態になりましたか？(12, 13)

7.イスラエルの民の誓う対象は何でしたか。またその結果はどうでしたか？

参考: 8:14 1列12:28-29

★終わりに:

8章全体で浮き彫りにされているイスラエルの特徴、人間の問題についてどんなことがわかりましたか。また、その現実を知った私たちは今日の社会でいかに生きたら良いでしょうか。

九章

神殿を壊される主 回復の預言

●はじめに:

アモス書の学びも最終回となりました。7章からアモスの見た幻について記述されていますが、9章でも前半には幻についての記述が続いています。しかし、後半には思いもよらない預言が展開しています。

1. 祭壇のかたわらに立ち神殿を壊される主

1. 主はどうして神殿の柱頭を打とうとされたのですか？

2. 9:2-3を読んで考えてください。

(1) これらの節では、神の裁きをどのように表現していますか？

(2) 人間は、神の前から本当に逃れられると思いますか？ 逃げられないと思いますか？

参考: 詩139:8-12

3. 「この目」(4) 「主の目」(8)とはどんな目だとあなたは想像しますか？

4. 9:5は8:8の繰り返しです。9:6のような主がとる行動を私たち人間はどのように防ぐことができると思いますか？

5. 9:7-8を見てください。

参考: 「クシュ人のようではないか」(7)

クシュ人とはエチオピア人のことで、当時のイスラエルの民にとって最果ての地の民と考えられていました。つまり、神に特別に愛されたイスラエルの民がもはや最果ての地に住む異民族のようになってしまったという意味です。

(1)ここで異民族であるペリシテ人、アラムが例に出されている理由は何だと思えますか？

(2)7, 8節から、主の特徴についてわかることを挙げてください。

(3)末信の人たちにも神の恵みが示されていることを、どのような事を通して理解できますか？

(マタ5:45, 使14:17参照)

6. 9:9に記されている「一つの石ころ」とは何のことだと思えますか？ここから、神の裁きの特徴についてどんなことがわかりますか？

II.回復の預言

7. 9:11において、突然のごとく「建て直す」という言葉が登場しています。

参考: 聖書の批評家は、それまでのアモス書の記述と11節からの部分があまりにもかけ離れているので、この部分は後世に加筆したものだと判断しています。

「ダビデの倒れている仮庵を起こし」(11)とは、どんなことを指していると思えますか？

これまで学んだイスラエルの民や国の状態を参考にして考えてください。

参考: 9:12だけを見ると、神は異邦人を犠牲にしてイスラエルの再建を意図したように思えますが、神がイスラエルの民の救いだけを意図していたのではないことは、エルサレム会議でヤコブがこの箇所を引用して述べた言葉からわかります。使15:14-18, イザ56:4-8

8. 9:13-15にはどのような希望が語られていますか？

9. どうして神は裁きの預言の最後に回復の預言を語ったのか考えてみましょう。

(1)裁きの宣告をし続けた神の意図はどこにあったのでしょうか？

(2)アモス書が裁きの預言だけで終わらずに、回復の預言で終わっているところに、神の人間に対するどんな思いが隠されていると思えますか？

★終わりに:

1.

アモス書には、裁かれて当然な状態の中に生きている人間に対して、執行される神の裁き（9章1～4節）、しかし完全には見捨てずに生かそうとする神のあわれみ（5章4節、9章11節）とその神に向かってとりなす預言者アモスの姿（7章2, 5節）が描かれています。

この神の裁き・あわれみ、また預言者のとりなしについては、新約聖書におけるイエス・キリストのうちに鮮やかに再現されています。

以下の御言葉を開いて確認しましょう。

(1)イエス・キリストの十字架において徹底的になされた神の裁き(1ヨハ2:2, 4:10)

(2)ひとり子イエス・キリストをこの世に遣わした神のあわれみ(エペ1:7, 2:4-5)

(3)今も私たちのためにとりなして下さる主イエス(ルカ23:34, ヘブ7:25)

2.

アモス書全体の学びを通して印象に残ったこと、学んだこと、今後の私たちの生き方の指針となったことなどを分かち合いましょう。

編集後記

このテキストは、1990年代に当時関東地区で奉仕されていた水口功主事によって作成されたものです。その後、手つかずのままにあったものを、この度発行させていただくことになりました。水口元主事のご労を長年埋もれさせてしまったことを、心苦しく思っております。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

このアモス書のテキストが書かれて、すでに20年が経っていますが、今でもその必要性は失われてはいません。いや、むしろ今こそアモス書を学ばなければいけないと感じさせられています。20世紀の終わりから、今世紀の初めにかけて、私たちの国の経済格差は広がってきたと言われていています。感覚が麻痺してしまうほど、テレビや新聞では貧困の問題が取り上げられています。そんな時代だからこそ、私たちはアモスの預言に耳を傾けなければいけません。決して簡単な学びではありませんが、KGKの仲間と共に時代を見つめる目を養ってほしいと願っています。

2018年2月

東北地区主事 老松望

主を求めて生きた預言者

発行日：2018年2月

著者：水口功元主事

編者：老松望, 成実朝子

発行者：キリスト者学生会

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-1 OCC3F

☎ 03-3294-6916

✉ office@kgkjapan.net